次第

山より出る北時雨〱行方や

定めなかるらん

ワキ詞

是ハ北國方

より出たる僧にて候我いまだ

都を見ず候程に此度思ひ立

みやこへのぼり候

冬たつや

旅の衣の朝またき〱雲も

行違遠近の山又やまを越過て

なほとて〳〵ちよるの一給ひ候ぞ

ワキ詞

〽唯今乃時雨をはらさんため

立よりて候さて此所をば

何と申候

シテ詞

〽それは時雨の

亭とてよしある所なり其心をも

志ろしめして立よらせ給ふ

かと思へばかやうに申也

ワキ詞

〽實に〳〵

是なる額を見れば時雨乃亭と書

かれたり折しも時雨する人

さうらへば是はいかなる人の建

ておかれたる所にて候

〽是は藤原の定家卿の建置

〽給ふ所なりなかりとも都のうちとは

中なれども心すごく志ぐれ物古る

なれハとて此亭を建ておき
時雨の比乃とし〴〵爰にて
哥をも詠し給ひし也なるを
下リ
ごきなといひ折からといひ
ぞ心をも知ろしめして逆縁の
法を説とふ給ひがの御菩提を
弔ひあまへ迎しくゝめ参らせ候
そう乃為に是まで顕れ来りたるわ
ワキ詞
さては藤原乃定家の卿建てゝ
をかれし所にや時雨を
此ゝ世留庵との哥ぞいかほど乃
言葉やらん
シテ詞
いや何れとも
定家卿我時雨乃ゝ詠哥数ゝ
あまたはあれていつれとも申難し

そなたのしゝ時雨とよみをきしと
偽りのなきよなりけり
神無月誰がまことより志ぐれ
そめけむ作者乃ことのわ私語
家よ思ひて詠まれしハ此
哥をやつして実ありけなる
言の葉の残さしも時雨ハ侘の

人ハ
なき世に残る跡なりし
あはれなる世よ我かよ杖
ともかくも累世に他生の縁
折もきぬ見そ一樹の陰宿
一河のながれ汲みて知るふ
心をさきて折りしをいはむ
少しも忘れ八昔の時雨ふるさく

人乃志らし ゆゑくなし シテ詞 これハ
式子内親王の御墓なるがまた此
かづらをバ定家かづらと申し候
ワキ詞 あらおもしろや定家葛とハ
いかやう謂はれにてかくハ申候
御物語候へ シテ詞 式子内親王始ハ
賀茂乃斎の宮にそなはりたまひしを

たまひしが程なくおりゐさせ
給ひしを定家卿しのびく
の御契浅からず其後式子内親王
程なく空しくなり給ひしに
定家の執心葛となりて御墓に
はひまとひたがひの苦しみ
離れやらず共に邪婬乃妄執を

浅緑花の跡もしげ猶こそ
参らせんとせ　まだ見ぬ物を
古の心の行くの跡も山遠ひて
通ふみちしきし露の世かゝりわ
よしなき身ハ色に々ふ路
おはしまさなれへハ世の中の
事茂より你なる心のおも茂

花薗絶ゆよしめしつゝわらく
ものこゝろれしく落なり悲しなるとて
昔ハ物を思はゝ舞の跡の心地
ばそしもなきゝありつ有志まき
霜より志ものふ拵りそゝ世によ
ふわめしやさあひ衣袖の涙の
力の昔ぞ衰ひさしと見ぞうな

離れもやらて蔦紅葉の色こかれ
まとはり荊の髪もむすほゝれ
露しもに消えかへる妄執を
たすけ給へやかわめし手枕
消なりし入りかた月もなとなく
しらましわあ庭や涙为連
やよ世しらましそ我身涙

はてぬあさちの霜よ朽よし
なりかきは残りても猶よし身
なるよしやなさけの物を
色にほのいてよそ見なとも今八
はしまし此うへぬまからう
式子内親王ともみえ来被
まつと涙すのこぬのはかなの乃

石は残すかすまざれども
見しはつきのあらん見せ
大渓を竹へ渡りと見えて
うきにわたりくぬもにしく数
月影すごく松風吹いて物すごく
草乃陰の露の身拂おりし雨落
西の峯にくみどふふ孫い

衣旅やつれ笈のとよやまき衰
ぞみとし思うは衰やすはすむよ数
たどるつき乃月を着ハ松風
蘆月にさとはなかりし翠帳紅
閨よ枕ならべし様々の事
なさし家のすまお小廊も灰茶哉
故くろし紀の雲外乃雨と

中々なまやまぬ典ハもなく
草木のありさまハ無心の意な
うきはなれて仏花なりせ給ふ
色し蕉あり葉やハもしく
是ハ只なるのわきまへ色
あら露乃めく見なさきて
小さ律もなき見法もなき

一味の法乃あめ乃したゝり乗
皆潤ひて草木国土悉皆
成仏乃縁をえぬまでよ家葛も
りし縁もほ経く〳〵山まゝ巻
ひ謡ゝ袂たづねく〳〵と是より
東北の鬼を出てある法然さよ
こゝ部遊よいそゝ羅八お笑し

一一ノ丶一一一一丶二一下一丶

げひきとりなくや定家の徒う

一一八ㇾ下一丶丶中二二乚一一八ㇾ一一丶下丶

のげの觴くて形ちいまゆきも移て

一丶一八ㇾ一

う躬ふりわ